



久喜市立久喜中学校

# 久喜中だより

学校教育目標 **志に生きる** 学校経営理念 **立志・真心・強健の久喜中教育**

平成31年1月号（平成31年1月8日発行）

HPIは久喜市立久喜中学校で検索



## あけましておめでとうございます

校長 堀内 俊吾



初日の出に赤く浮かび上がる校舎

皆様、お健やかに新春をお迎えのことと存じます。昨年は、保護者や地域の皆様に多大なる御理解と御協力を賜り、実り多き1年とすることができました。心より感謝申し上げます。

私は元旦に地元の神社で初詣をし、その後、久喜中の校庭で初日を拝みました。真っ赤に映し出された校舎を眺めながら、皆さまのお力添えをもとに、もっと魅力ある学校を創っていこうと決意を新たにいたしました。

### 内部を充実させて、次の段階への準備の年に

亥



さて、本年の干支は亥年（正式には己亥（つちのと））。「己（つちのと）」という漢字は3本の直線が整然と並んでいる形をしており、「完成した自己や成熟した組織が、足元を固めて、次の段階を目指す準備をする年」と言われます。また、「亥（い）」は十二支の最後で冬を表しており、春の芽吹きまでじっと固い種の中でエネルギーを内に込めているイメージの年だそうです。したがって、亥の年は、翌年から始まる次の種の成長に備えて「個人は、知識を増やし心や精神を育てる」「組織は、人材育成や設備投資、財産基盤を固める」など、外に向けての活動ではなく、内部の充実を心がけると良い年だそうです。

本校でも、生徒一人一人の更なる成長のために基礎的・基本的な知識・技能の定着を確実に図るとともに、組織として家庭・地域の信託に応えられますよう、教職員の資質・能力の一層の向上に努めてまいりますので、本年も変わらぬ御支援を賜りますようお願いいたします。

あわせて、生徒や保護者、地域の皆様にとりまして、幸多き年となりますことを心よりお祈り申し上げます。

### 小学校で英語の出前授業



本校では久喜小・本町小・久喜北小と小中一貫教育（遷善館学園）を推進していますが、その一環として、本校の英語科教員3名が各小学校に出向き、6年生の各学級で1Lesson分の授業を行っています。久喜北小で授業をしている平田教諭は「子供たちの反応がよく、大いに盛り上がり、楽しい授業が展開できます。来年、入学して来るのが待ち遠しいです」とニコニコしながら話しています。また、6年生の藤代珠季さんは「私は、外国語の授業が好きだったので、中学校の先生が来ると聞いて難しいのかなとドキドキしていました。しかし、平田先生は楽しく授業を進めてくださったので、中学校での英語を学ぶことが楽しみになりました」という感想を寄せてくれました。

小学校3年生から外国語活動が、5年生からは教科書を使った英語教育が始まりました。これにより、中学校の英語教育も転換期を迎えています。今回の取組を通して、改めて小中の接続の大切さを教員自身が肌で感じ、間もなく入学して来る6年生の期待に応えられるような授業を展開してまいります。

PTAのお計らいにより、本校では保護者の皆様による「朝のあいさつ運動」を実施していただいております。代表生徒や教職員とともに、顔見知りの保護者の皆様から声をかけていただき、生徒たちも嬉しそうです。すでに3・2年生が終了し、現在は1年生の保護者の皆様が担当となっています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

## 「たった一言が教えてくれたこと」

久喜市立久喜中学校1年 鈴木日和子

塾での出来事だった。その日は月1回のネイティブの先生による英語の授業で、ネイティブの先生は月ごとに違うのだが、その時の先生は黒人の女性だった。アルファベットを使ったビンゴゲームやスペル当て、早押しクイズなど様々な企画を考えてきてくれていた。その授業の中で、一人がもう一人の背中に指でアルファベットを書いて、書かれた人は何のアルファベットかを当てる、というゲームがあった。最初は私が先生の背中に指でアルファベットを書く番だった。何事もなく私の番は終わり、今度は先生が私の背中に書く番になった。すると先生は書く前に、「タッチオーケー？」と私に聞いてきた。私は、「オーケー。」と答えた。先生の番が始まり、それから間もなくして授業は終わった。

塾からの帰り道、何か心に引っかかるものがあった。何だろう。そうか。先生のあの一言、「タッチオーケー？」という言葉が引っかかっているのだ。その言葉の何が引っかかっているのかを考えてみた。しばらく考えると、先生がなぜ「触れていいか」と事前に聞いたのか、が気になっていることに気づいた。「触れていいか」を確認することは、「触れちゃダメだ」という答えがあるかもしれないということなのだろうか。「触れちゃダメ」と言ったら、どうしたのだろうか。そんな不思議な気持ちを持ちながら家に帰った。

数日後、「アメリカで白人警官が黒人を射殺」というニュースをテレビで見た。警官は、「指示に従わなかったから」と話しているそうだが、両手を挙げて一切抵抗していない様に見える姿が映る動画が流れていた。白人警官による黒人射殺問題は、ここ数年頻発しているようだ。黒人差別は過去の歴史ではなく、今もなお差別で苦しむ人がいるなんて悲しくなった。調べてみると、「自由と平等の国」であるはずのアメリカで、黒人としていかに生きていくかが記されたエッセイや、黒人としての振る舞い方を親が子供に叩き込む姿が描かれている小説を見つけた。生まれながらの肌の色で差別されるなんてひどいな、と思った。差別があることを前提に、自分の振る舞いが誤解を生まないよう行動しなければならぬなんて、悲しいなと思った。はっとした。塾での出来事の謎が解けたような気がした。もしかして塾での出来事は、この黒人差別が関係しているのではないだろうか。「私が触っても嫌な気持ちはしませんか？」という意味が含まれていたのではないだろうか。幼いころからこういう確認を必ずすることが、自分の身を差別から守ることだった、という可能性もあるのではないだろうか。何だか、とてもやるせない気持ちになってきた。あの時の先生には、その授業以来お会いしていないので、真意を聞くことは出来ていない。

もやもやとした気持ちが消えず、母に話をした。すると母は、「黒人差別が今も問題になっているよね。だからそういう推測をしたんだね。」と私の気持ちを分かってくれた。それと同時に、「ほかの理由の可能性もあるかもよ。」と言った。例えば、と二つ例示してくれた。一つ目は、急に背中を触るとくすぐったがる子供もいるかもしれない。だからただ単に「行くよ」という合図で行ったのかもしれないということ。二つ目は、相手の文化や価値観を尊重して、確認したのかもしれないということ。どういうことか尋ねると、例えば、小さい子供に「いい子だね」と頭をなでる行為は日本人にしてみれば愛情表現だが、東南アジアの国の中には、頭は神聖なものとして、子供といえども人の頭を勝手に触るのは失礼だという文化のところもある。実際、母もインドネシアに留学した時に経験したそうだ。私が今生活している地域は、様々な人種、文化、宗教などが混在しているとは言い難い。異文化を意識する機会は殆どない。しかし、そのネイティブの先生は、人と接する時に当たり前のように、相手は自分と違う文化、価値観かもしれないとっていて、当たり前のこととして相手の意思を汲んでから行動しているのかもしれない。差別の歴史があったからではなく、人は自分とは違う価値観かもしれないという多様性を理解しているからこそその行動かもしれない、ということ。

私は母の話を聞き、色々な背景が考えられると思った。ただ、どの背景だったとしても、ひとつの共通点があることに気づいた。それは「相手を思いやる気持ち」である。自分の行動によって、相手が不快に思わないか、驚かないか、という心遣いから生まれた言葉であることは確かだ。そう考えると、たった一言に込められた思いはとても尊いものだと感じてきた。

国際化が進み、技術の発展により、私たちは今後世界中の人と触れ合っていくだろう。だからこそ多様性を理解し、様々な文化、価値観を尊重して相手を思いやる気持ちを持っていきたいと思った。たった一言だが、あの言葉をかけてくれた先生に心から感謝したい。